

第3節 加古川下流域左岸の遺跡動向（第12図）

JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴い溝之口遺跡の調査を行った結果、加古川下流域左岸という広い範囲での溝之口遺跡の位置付けを行いたい。検討を行う対象範囲は、北東側が日岡丘陵と段丘、南東側が野口段丘、西側が加古川に囲まれた、加古川左岸の沖積平野あるいは氾濫原上にある。坂元遺跡は野口段丘上に立地しており、溝之口遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡・栗津遺跡・平野遺跡は加古川左岸の沖積平野に立地している。

1. 溝之口遺跡と周辺の遺跡

溝之口遺跡 M は、北東から南西にかけて約1,000m、北西から南東にかけて約600mの、加古川に沿った長い範囲に分布している。現在までに、遺跡範囲内を大きく分けて5地点で調査を行っている。

溝之口遺跡 M1地点は昭和43年・44年の加古川バイパスの調査地区及び、昭和62年度三次調査地区である。弥生時代中期前半の土坑、中期中葉から後半の竪穴住居・土坑・木棺墓、後期の竪穴住居、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の溝、平安時代の掘立柱建物などがある。

溝之口遺跡 M2地点は住宅開発にかかわる昭和61年度～平成9年度の調査区である。M1地点から東に約200mの場所に位置する。弥生時代中期前半の土坑、中期中葉から後半の方形周溝墓、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝、奈良時代の掘立柱建物・柵・井戸・溝などがある。

溝之口遺跡 M3地点は住宅開発にかかわる昭和57年度～平成4年度の調査区である。M1地点と M2地点の間に位置する。弥生時代中期の水田・溝・流路、古墳時代の水田などがある。

溝之口遺跡 M4地点は今回報告の JR 山陽本線地区の A～F 地区である。M1地点から南西に約600mの場所に位置する。弥生時代中期の柱穴・溝、古墳時代初頭の竪穴住居・溝、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の掘立柱建物・竪穴住居・溝、平安時代の溝、近世の溝などがある。

溝之口遺跡 M5地点は今回報告の JR 加古川線地区の H～K 地区である。M1地点から西に約200mの場所に位置する。弥生時代後期前半の土器、古墳時代後期の溝、平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・溝などがある。

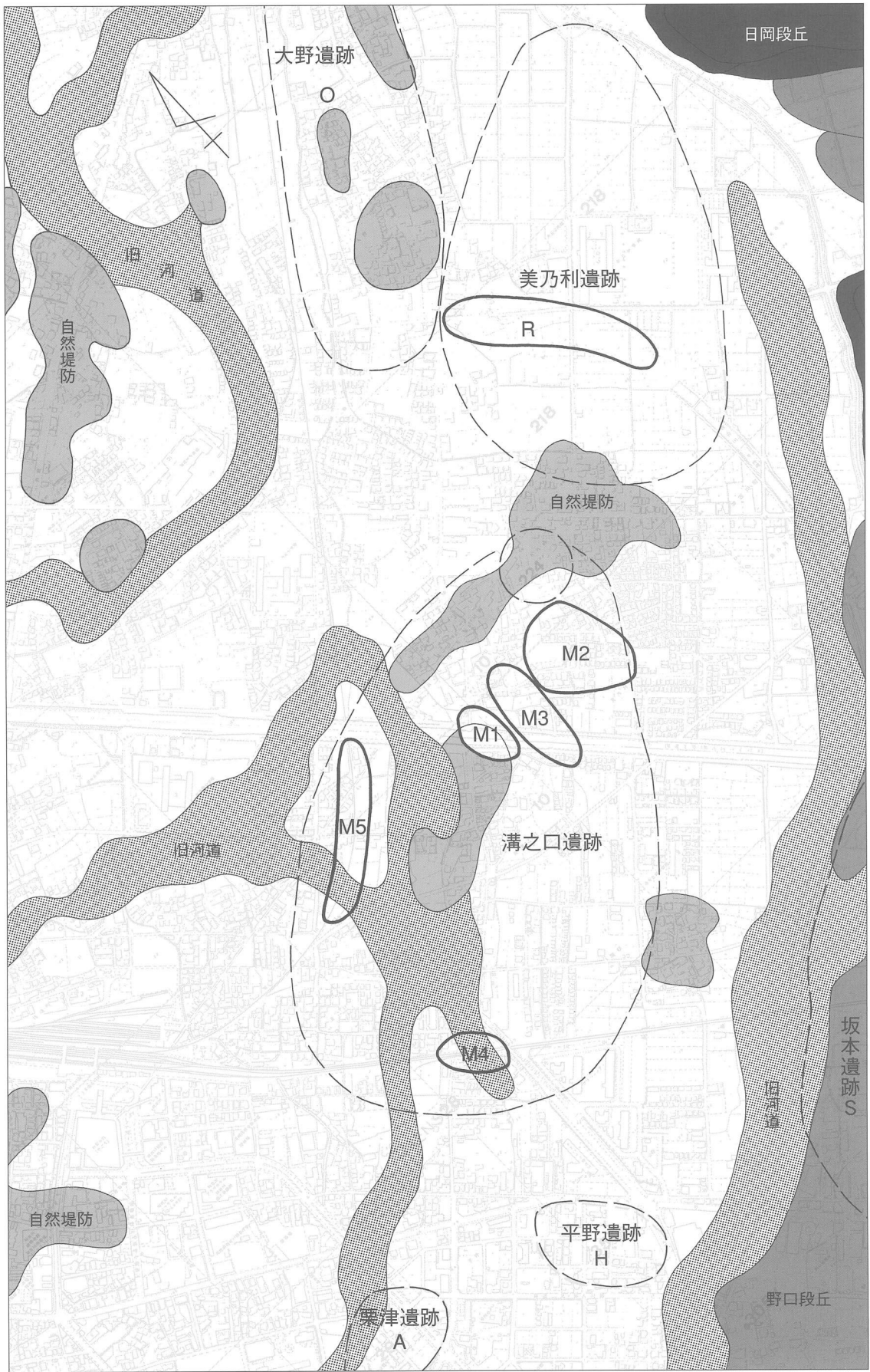
美乃利遺跡 R は溝之口遺跡 M1地点から北東に約700mの場所に位置する。弥生時代前期の水田、弥生時代中期前半の土坑・溝、弥生時代中期後半の竪穴住居・土坑・溝、弥生時代後期後半の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物・溝、平安時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓・畠、鎌倉時代の溝などがある。

大野遺跡 O は溝之口遺跡 M1地点から北に約800mの場所に位置する。弥生時代中期の溝、奈良時代・鎌倉時代の掘立柱建物、室町時代の掘立柱建物などがある。

栗津遺跡 A は溝之口遺跡 M1地点から南西に約1,000mの場所に位置する。

平野遺跡 H は溝之口遺跡 M1地点から南西に約900mの場所に位置する。

坂元遺跡 S は溝之口遺跡 M1地点から南東に約800mの場所に位置する。弥生時代中期の竪穴住居・2箇所の方周溝墓群・土坑、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の土坑・埴輪窯、奈良時代の掘立柱建物・井戸、鎌倉時代の掘立柱建物などがある。



第12図 溝之口遺跡周辺の微地形と遺跡分布 (1/10,000)

第5表 溝之口遺跡周辺の遺跡動態

	立地	弥生時代 前期	弥生時代 中期前半	弥生時代 中期中葉	弥生時代 中期後半	弥生時代 後期前半	弥生時代 後期後半	古墳時代 前期	古墳時代 中期	古墳時代 後期	奈良時代	平安時代 前半	平安時代 後半	鎌倉時代	室町時代
美乃利遺跡	埋没微高地	田	坑溝田		住坑溝		住				住溝		住墓畠		
溝之口遺跡 M2	埋没微高地		坑		住墓		住			住溝	住柵溝				
溝之口遺跡 M3	埋没微高地				田溝		溝			溝					
溝之口遺跡 M1	埋没微高地		坑	住坑	住墓		住			住	住		住		
溝之口遺跡 M4	埋没微高地		溝	柱			住柵	住	住坑溝	住		溝			
平野遺跡	埋没微高地														
栗津遺跡	埋没微高地														
大野遺跡	沖積地				溝						住			住	住
溝之口遺跡 M5	沖積地									溝	溝	溝	住	住	
栗津大年遺跡	沖積地													住墓畠	
坂元遺跡	段丘上				住墓坑		住			墓窯	住			住	

2. 遺跡の変遷（第5表）

溝之口遺跡周辺の上記の遺跡変遷をまとめてみる。

弥生時代前期は美乃利遺跡 R の水田がある。

弥生時代中期前半は美乃利遺跡 R で土坑・溝・水田などあり、多量の土器が出土している。溝之口遺跡 M1地点・M2地点で土坑を、M4地点で溝を検出しており、溝之口遺跡の初源である。確実な住居は見つかっていない。

弥生時代中期中葉は溝之口遺跡 M1地点で土坑・堅穴住居が調査されている。

弥生時代中期後半は溝之口遺跡 M1地点で堅穴住居・墓、溝之口遺跡 M2地点で方形周溝墓群・堅穴住居が調査されており、間に位置する溝之口遺跡 M3地点で水田と溝が調査されている。美乃利遺跡 R では堅穴住居、坂元遺跡 S で堅穴住居と 2 群の方形周溝墓群が調査されている。

弥生時代後期前半は溝之口遺跡 M5地点下層の堆積層から土器が出土しているのみであり、弥生時代後期後半になって溝之口遺跡 M1地点、美乃利遺跡 R、坂元遺跡 S で堅穴住居が調査されており、溝之口遺跡 M4地点では古墳時代初頭まで継続している。

古墳時代中期は調査例が少なく、溝之口遺跡 M4地点で堅穴住居などがある。

古墳時代後期は溝之口遺跡 M1地点・M2地点・M4地点で堅穴住居などが調査されている。坂元遺跡 S では埴輪窯があり、古墳？や土坑などもある。

奈良時代は溝之口遺跡 M2地点で掘立柱建物・柵・井戸・溝などが調査されており、官衙の様相が強い。坂元遺跡 S では掘立柱建物・井戸などが調査されており、加古駅の駅子の集落と考えられている。

平安時代後期は溝之口遺跡 M1地点・M5地点で掘立柱建物・溝、溝之口遺跡 M4地点で溝などが調査されており、鎌倉時代にかけて沖積地の開発が進んでいったと考えられる。

鎌倉時代は溝之口遺跡 M5地点で掘立柱建物・溝、大野遺跡 O・坂元遺跡 S で掘立柱建物などが調査されている。

3. 遺跡の変遷と環境変化

溝之口遺跡周辺の上記の遺跡変遷と立地を中心にまとめてみる。

日岡以南の加古川左岸の現在の地形は、加古川から東に向かって、加古川の沖積平野と段丘がある。沖積平野には氾濫原と微高地があり、さらに下層には氾濫原と埋没低位段丘がある。これらは加古川の沖積作用によって変化している。沖積平野には条里地割が存在している場所があり、存在していない場

所は、条里地割が施工されなかった場所と、後に洪水により消滅した場所とがある。埋没低位段丘上の遺跡は、上流から美乃利遺跡・溝之口遺跡・平野遺跡・栗津遺跡などの居住域が存在している。これらのうち律令期より前は洪水などの自然条件に大きく影響されていることが考えられる。

また平安時代以降は低位段丘の埋没化と氾濫原の微高地化により、埋没低位段丘より西側に居住域の範囲を広げていった。この結果、溝之口遺跡 M5地点や大野遺跡・栗津大年遺跡などが新たに形成された。

坂元遺跡は高位の野口段丘上に立地しているため、洪水などの影響がなく、弥生時代から中世にかけて存在しない時期もあるが継続して存在している。

以上のように、東から高位段丘に立地する坂元遺跡、現在埋没している低位段丘に立地する美乃利遺跡・溝之口遺跡 M1～M4地点・平野遺跡・栗津遺跡、氾濫原に立地する大野遺跡・溝之口遺跡 M5地点・栗津大年遺跡に分かれる。これらの立地は遺跡の成立時期に違いがあることが判明した。

3. 溝之口遺跡について

溝之口遺跡は昭和43年以来、大きく5地域で調査が行われており、弥生時代中期から中世にかけての遺跡であることが判明している。今回の JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴って、山陽本線地区と加古川線地区の2箇所で行なった。山陽本線地区の A・B・C・E 地区（溝之口遺跡 M4地点）は埋没低位段丘上に立地し、主に古墳時代前期から後期の集落であることが判明し、加古川線地区の H・I・J・K 地区（溝之口遺跡 M5地点）は沖積地に立地し、主に平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物を中心とした集落であることが判明した。

溝之口遺跡の範囲は第1次調査時の分布調査の成果によって囲まれているが、この範囲は分布調査が行われた範囲とほぼ同じであり、分布調査が行われなかった今回調査の山陽本線地区の A・B・C・E 地区などにより当然分布範囲が広がることが想定できる。そこで確認調査により遺構の存在が明らかになった段階で溝之口遺跡の範囲を拡大した。ところが、今回の報告にあるように多様な遺跡内容であり、地点により内容も異なっていることが明らかになった。そこで、溝之口遺跡の範囲の再考をすべきであると考えます。

加古川下流域左岸の帯状に分布する埋没低位段丘上の美乃利遺跡・溝之口遺跡・平野遺跡・栗津遺跡などは、美乃利・溝之口遺跡群として捉えることが良いのではないかと考える。将来的に、遺跡群中の発掘調査が進展し、地形的なまとまりや時代的なまとまりがはっきりした段階で、遺跡範囲を再検討すべきであると考えます。詳細な発掘調査の進展を期待する。

参考文献

参考文献は第1章第2節の P. 4 に掲げている。